

個人研究発表

ヘーゲル『精神現象学』「B. 自己意識」章における奴の自己意識の陶冶

大和 慶之 （社会学研究科修士課程）

この発表では、『精神現象学』「B. 自己意識」章の「主と奴」論を自己意識の陶冶論として自己意識と物の関係について考察する。その考察を通じて、「主と奴」における奴の自己意識の陶冶の成果とその不十分さ、そして主の自己意識の位置づけを明らかにする。

一般的に「主と奴」の解釈では、主と奴という二つの自己意識の関係、または二つの自己意識の立場の逆転が強調されてきた。だが、主と奴という二つの自己意識の関係をめぐる問題として「主と奴」を捉えてしまうと、「B. 自己意識」章の次に続く箇所である「ストア主義」との繋がりをうまく説明することができない。そこで、ここでは「主と奴」を奴の自己意識の陶冶の過程として捉えることで、この問題を解決しようと試みる。

この発表では、以下のような方法をとる。すなわち、「主と奴」を二つの自己意識の関係、そして主と奴の逆転の過程を述べた箇所として捉えることの問題点、すなわち「主と奴」が承認論としては不十分だということを示し、自己意識と物の関係から自己意識の陶冶の過程として、「主と奴」を再解釈する。

まず、ヘーゲルは「主と奴」の冒頭で本来あるべき承認の概要を提示している。それは平等な自己意識が互いの自立性を認め合うというものである。この相互承認を通じて初めて自己意識は真に自立的だということができる。だが、「主と奴」の本題ではそのような対等な自己意識は登場しない。登場するのは、一見自立的な主と、一見非自立的な奴という異なる二つの自己意識である。ヘーゲルはそれら二つの自己意識のうち主の自己意識が矛盾を抱えていることを明らかにする。というのも、主は物との関係を排し、奴から一方的に承認されることで自立的なのだが、実は主の自立性が物との関係においてしか、あるいは奴なしには成立しないということが明かされるのである。その後、主の自己意識は問題にされず、専ら奴の自己意識のみに焦点が当てられる。そしてこの奴が物との関係において自己を陶冶し、真の自立性を獲得するとしている。以上のことを踏まえて、「主と奴」を自己意識の関係に焦点を当てたものではなく、単に奴の自己意識の陶冶論としてみるのが適切だと主張する。

以上のヘーゲルの主張を踏まえ、この発表では主を、奴が自立性を獲得する過程の契機でしかないと捉える。確かに主は自己意識なのだが、主は自己意識と物というロジックを導き出すために登場するだけである。一方、奴の自己意識の陶冶については以下のように結論づける。確かに奴は自立性を獲得する。だが、その自立性は他の自己意識による承認によって獲得されたものではなく、物を通じてなされたに過ぎない。この点に奴の自己意識の陶冶の欠点がある。この奴の自己意識の陶冶の不十分さによって、自己意識は「ストア主義」という形態をとるのである。